

# 古代日本語の「動名詞」と「分詞」

須田 淳 一\*

## 1 問題のありか

### 1.1 目的

本稿は「古代日本語の『不定詞』」(須田2019a)の続編にあたるもので、同じく上代から近世にかけての古代日本語において、非-定型 (non-finite) のうちいわゆる準動詞の語形はあるか、あるとすればどのようなものか、を明らかにすることを目的としている。特に、「動名詞 (gerunds)」及び「分詞 (participles)」と総称される語形に相当すると考えられるものについて理論的に同定する試論である。そのための方法としては、須田2018で導き出した準動詞三者の傾向(表I)を基準として、定義によるのではなく準動詞間相互の偏差によって三者を相対的に同定することを試みている。なお、古代印欧語などの文法記述に見られるこれら準動詞形を異なる語族言語において同定することの可否、日本語に関するこの観点からの先行研究、その意義などについては、上記拙稿(須田2019aの第1節及び第2節)において整理してあり、本稿では割愛した。

### 1.2 問題

準動詞形のより汎言語的な傾向特徴の抽出を試みた須田2018の結果(表

---

\*専修大学文学部教授

表 I 動名詞・不定詞・分詞の汎言語的な特徴分布モデル

	曲用	格支配	連体修飾	連用修飾	テンス	ムード	アスペクト	ヴォイス
動名詞	++	±	±	+*	?	?	+	?
不定詞	±	+	++	+	±	+	+	+
分詞	-	++	+	++	?	?	+	+

++ ; 当該カテゴリーをほぼ十全に有する

+ ; 当該カテゴリーを相当程度有する

± ; 当該カテゴリーを一定の制約とともに有する

- ; 当該カテゴリーに強い制約がある

? ; 当該カテゴリーに一定の傾向を析出できない

\* 但し、連用的な接続性 (seriality) を含む

I) が示していることの一つは、動名詞・不定詞・分詞の分布を特徴付けるカテゴリーとして、テンス及びムードについては不明な点多々あり特徴抽出に至らないということ、また、アスペクトやヴォイスについては一定の傾向を析出できたものの三者間での偏差は明瞭には認められないこと、などがあった。このため、これら文法カテゴリーは三者を相対化する指標とはなり得ないということになる。いきおい、表 I をもとに抽出できた主要偏差は、不定詞を扱った須田2019と同様、以下のとおりとなる<sup>[注1]</sup>。

動名詞：(a) 曲用が明示的である (b) 接続性が強い

(c) 格支配が十全ではない

不定詞：(d) 連体修飾機能が強い

(e) 多機能的である (ほとんどの動詞的カテゴリーを持つ)

分詞：(f) 格支配が明示的である (g) 連用修飾機能が強い

(h) 曲用が十全ではない

したがって本稿でも、須田2018でのこの分布表にもとづいて両語形の析

出をおこなっていく。すなわち、動名詞については、上記(a), (b), (c)を、分詞については(f), (g), (h)を、それぞれ要件として満たす語形を同定する。

## 2 古代日本語において「動名詞」に準ずる語形

### 2.1 従来説の動名詞

動名詞の要件は、不定詞及び分詞との相対化において、(a) 曲用 (declension) が明示的であること、(b) 接続性 (seriality) が強いこと、であった。またこのほかに副次的な要件として、(c) 格支配が十全でないこと、なども挙げられた。

従来、アルタイ諸語の通時的な研究分野において、S. Martin 1987以降、古代日本語についての「動名詞」と指摘されてきたものがある。これは、主としていわゆる第二中止形 ([連用形+テ] 形) のことを指している。ところが、このテ形用言は、文の中では単に本動詞の用法にとどまるものであり、体言性 (nominality) をおよそ欠如している<sup>[註2]</sup>。体言性を欠くということは、基本的に膠着性言語では曲用しないということを意味している。このため、「連用形+テ」形式は、曲用に強い制約があるという点で基本要件(a)を満たさず、須田2018が規定する「動名詞」に相当する語形とは認められないことになる。

では、古代日本語において、曲用がはっきりして、かつ、一定の接続性を有する語形としては、どのようなものが候補として挙げられるだろうか。

### 2.2 連用形名詞用法

#### (1) 曲用に関して

曲用するという要件を満たす形式としては、同じく連用形出自の現象であるいわゆる動詞連用形による名詞用法が挙げられる。「連用形転成名詞」

や「動作名詞」(action nouns) などとも呼ばれる動詞派生名詞 (deverbative nouns) 用法である。上代ですでに、「行き」(「行きのまにまに〜」万・543, 同 2, 13, 867他), 「返り」(「返りにだにも〜」万・3978) など, 動詞連用形による明らかな名詞的用法が観察される。これらは指摘するまでもなく, 格などによって曲用しており, 同時にそのことはこれらの語が体言性を担保していることの根拠でもある。

但し実際には, こうした連用形名詞用法とみられる事例は, 動詞ごとに成立時期はまちまちである。例えば, 「始(初)め」(動詞「はじむ」の連用形名詞用法) などは上代からあるが, 「終はり」(動詞「をはる」の連用形名詞用法) は中古期になって確認できる。動詞としての「をはる」は上代に出現しているにもかかわらず, である。同様にして, 「ありき」(動詞「歩く」), 「切り」など基本動詞出自の多くの名詞用法は, 中古から漸次発生する場合が多い。「走り」などは中世初期から, 「読み」など近世に発生するものもある。「飛び」, 「立ち」, 「撥ね」(動詞「はぬ」) などの出自となる本動詞は上代に確認できるものの, その連用形名詞用法は近世に至っても発生を確認できないものも少なくない。

それは, 連用形由来の動作的名詞が資料上で単に確認できないだけであって, 用法としては発生していたのか, それとも, そもそも用法として成立していなかったのかを明言できる材料は乏しい。この用法が発生したのは上代においてではあるものの, 確例は十分にあるわけではなく, より多くの動詞にこの用法が拡張するのは, 中古から漸次, そして中世以降になって汎化していく傾向にあったと言えよう。

加えて, この振る舞いは, ハダカの連用形に限られないということにも留意したい。接尾辞的助動詞が付いた複合用言においても, この傾向を観察できる。例えば, 「人笑はれなることもこそ〜」(源・桐壺)で, 受動ヴォイスをあらわすールの連用形であるーレとの複合用言が, 連用形「笑はれ」となっており, それが語構成上, 「人」に接続して「人笑はれ」(他人から

もの笑いにされることの義」という体言性を示している。これは、例えば「夕去りて～」では「夕」と動詞「去る」のテ形の連語句であったものが、名詞としての「夕去り」で単一の体言として接続し合成語となる事例(「夕去りは帰りつつ～」伊勢69)と同様の構造になっている。このような事例は多くはないが、連用形が、ハダカの場合だけでなく助動詞類を伴っても成立し得る — いわゆる助動詞の連用形にも成立する — 汎用化の萌芽を中古において生じていたことを示すものと考えられる。

## (2) 接続性に関して

前稿(須田2019a)でも、その定義づけに関して否定的に取り上げた論考ではあるが、S. Martin (ibid.) の主張の中で、接続性に関わっては看過できない指摘がある。同氏が「動名詞」を認定する際、一定の強さの接続性が介在することを認識していた面があったことは、注目しておくべきだろう。同論に見られる接続性向は、たとえば最も古くは、タリの前身とも言われる「V-テあり」の用法(「島のむろの木離れテある」万3601)をはじめ、中古期の和文で多用される「V-テ思ふ」などに代表されるように、述語となる用言の複合語を構成するタイプに典型的に見られる、「補助」的または「修飾」的な関係のものを主に指している。確かにこれは、語と語との连接的な振る舞いと言えるものである。

他方ではしかし、補助または修飾的な関係に立つ事例は、ハダカの動詞連用形にも見られる現象であるが、それらについては、同論では除外されている。例えば、「語る」という動詞の連用形事例をあげるならば、「語り継ぐ」(伝承する義)・「語り放く」(語りたいほうだいにする義)において、「語る」に動詞性を読み込む場合には、「継ぐ」や「放く(サク)」という後項動詞は「語り」に補助的な関係を与えている。よって、接続性は、S. Martin (ibid.) が指摘した現象(テ形)のみにとどまるものではなく、より広範な現象について検証されるべきものだと言えよう。

そして、このこととあわせて本稿で指摘しておきたいことは、上例の表現が、{語ることを繋いでいく}・{語ることをほしのままにする}といった概念構造を持っているとすれば、その場合には「語り」は、より体言的に捉えられていることになる、という点である。このほか、連体的な修飾による接続性を示す事例（「語り種（グサ）」・「継ぎ橋」など）もある。が、それらにおいても、{語りのための題材}・{板を複数渡した継ぎ形式の橋}などの概念構造において、単独での連用形転成名詞といえる「語り」（「永き世の語りにしつつ〜」万1801）や「継ぎ」（「まきむく山は継ぎのよろしも」万1093）などの用法は、当該の連体修飾的な用法と比して、体言性という点で必ずしも大きく隔たったものではなかったと考えられる。

上代で観察される当該用法の接続性は、現代日本語（例えば「弾き語り」（{弾きと語り}）・「継ぎ接ぎ」（{継いだものと接いだもの}）、「語り部」（語りを担う者）等）にも引き継がれ、用言において汎用的な用法となっている。これらの前項が体言性を全く欠いているとは認めがたい。

以上のとおり、複合的ないし合成的な用言の統一体をつくるための語構成次元で、修飾あるいは補助的な関係づけ機能とも言えるこうした振る舞いは、テ形の連用形だけではなく、ハダカの連用形においても上代より見られるものである。この性質は、本稿の動名詞要件 (b) 接続性の強さを有することと矛盾していない。また、一見すると動詞の複合・合成と分析できるこうした用法にあっても、上代当時、前項が体言性を示す語として再分析されていた可能性は否定できないのである。

さらに、接続という性質は、曲用との関わりにおいて、主として近世中期以降に格的な関係の多様化にともなって発生する後置詞 (postpositionals) との接続性が指摘できる。後置詞とは、主として動詞出自の、例えば「よりにて (よって)」・「つきて (ついて)」・「ともに」等であるが、これらはより細分化された格的関係を明示的にあらわすために、多様な格的形式によって曲用する能力が体言に求められて成立したものだと考えられ

る<sup>[註3]</sup>。こうした格的な機能を帯びた後置詞との接続関係が近現代では一層強化されていく経緯の中で、連用形転成名詞は、その用法を拡張させていったのではないか。すなわち、より文的な表現（「切手を集めること-に\_\_よって」・「切手を集めること-と\_ともに」）よりも、より語的な、したがって体言的な要素（「切手集め-に+よって」・「切手集め-と+ともに」）となることが求められる表現に傾いていく。つまり、連体形転成名詞が汎用化する動機の一つは、モノではなくデキゴトを体言化する必要性が増えるほど、デキゴト的な体言に付与された格の機能に、より多様性が求められるようになっていったことが背景にあると考えられる。

連用形転成名詞は、曲用の延長上にあると考えられる後置詞という語との接続によって、用言一般の用法として確立していく。それにとまって、その体言性も強化され、動名詞の要件(a)を一層満たすものとなっていったと類推される。

### (3) 格支配に関して

表Iで、動名詞では十全でなくても格支配があると規定された(要件(c))。連用形の転成名詞用法は、このより周辺的な特徴要件についても満たしているだろうか。

例えば現代日本語で、「切手集め」の「集め」は「切手」を補語的な成分として関係づけている。しかし、実際の表現においては格形の補語成分であることを示す-ヲが膠着することはない。こうした連用形名詞用法は、体言相当であるので属格以外の格支配は欠くことが義務的となっている。「瓦礫の取り出しが進む。」に対して、「瓦礫を取り出しが進む。」は非文となるようにである。したがって、格支配は欠いていると考えられ、この種の連用形用法は基本的には、動名詞という認定には消極的な要因を抱えている。

ところが、古代日本語に、頻度は低いながらも次のような用法があることが知

られている（小田2014）。「大船を漕ぎのまにまに岩に触れ」（万557）、「消え果てて止みぬばかりか年を経て君を思ひのしるしななければ」（後撰517）など。これらの事例では、連用形が、ノ格によって曲用して名詞相当の語となっている一方で、ヲ格を支配している。

こうした事例の限りであるが、古代語のハダカの連用形は、用言由来ではあるものの、先述のとおり曲用によって強い体言性を示す一方で、格支配を完全に欠いているわけではない性質が窺える。

### 2.3 要件を満たすその他の語形

#### (1) 形容詞の連用形名詞用法

用言のうち形容詞類については、古代日本語においてはその連用形は体言性を示さない。形容詞類が体言性を示す場合には、しばしば語幹そのものによるハダカの語幹用法をとる場合がある。しかし、ク活用形容詞の一部で、その連用形に一定の体言性を認めることのできる事例がある。「遠くよりかをれる匂ひ」（源・東屋）、「公任が永くの名に候ふべし。」（今昔24-33）などの事例では、その連用形が体言性を強く帯びている。これは現代語に至っても、形容詞を名詞化する接尾辞-サや-ミによる用法とは別に、一部の形容詞（早く、多く、少し、近く等）で残存している。

例えば、「遠くまで」と「遠きまで」とを比較した場合、後者、単独の連体形（準体法）による「遠き」は、含意ないし直接指示される空間や物体・ヒト（例えば「遠きヒト」など文脈に依存して決まる）が持っている属性（そのヒトが持っている空間的距離）を示しており、その意味では形容詞性を残している。これに対し、前者の連用形名詞用法では、「遠く」は空間的な隔たりのある {地点} という名詞的な意味が前面に出ていて、属性を付与するのではなくそれ自体の属性を体言的に示している。

このように、形容詞においても、連用形はその名詞用法において、形容詞性を弱めて名詞（属性名詞）により近づいていると言える。動詞に限ら



ず形容詞を含む用言においても、連用形が体言性を示す傾向を示すことの一つの表れとみることができよう。

## (2) 「ク語法」

曲用がはっきりしているという点で、体言相当の語形ということ、かつ、語が連続する接続用法を持つということ、この二点から探査する場合、ひとまず以下の二つの語形が該当する。一つは、準体用法(名詞用法)の連体形、もう一つは、ク語法である。

連体形準体法は、曲用する。しかし、例えば、連体形準体法節の中に活動主体を示すノ格がある場合、二重のノ格は不可となる(「宿徳にてましましける大徳のはやう死にけるが(\*ノ)室に、」大和25)などの振る舞いがあることが知られている。したがって、曲用するがそれは十全にはない。このことを以て、動名詞の候補とはなり得ないことになる。加えて、接続性が強いという二次的要件は、準体法連体形の場合、後続の体言を連体修飾することを本分とする連体形とは違い、基本的に接続性を欠いている。

これに比べ、いわゆるク語法(-クまたは-ラク)は、形容詞を含めて(形容詞ではク形に限られる)、用言を体言化するはたらきがある<sup>[註4]</sup>。これに伴って格形及び取り立て接尾辞を曲用させることに制約はない。この点で同時代の連体形準体法による節が属格などで一定の制約があることと対照的である。さらにク語法は、格支配もある。文成分の観点からは、主節の述語を構成して文終止となる用法は稀にあるが、その場合コピュラ的な単語(「あり」・「見ゆ」など)を後接することで成り立つ。この振る舞いは、连接的なものだと考えることができよう。ク語法の多くは補語になるが、述語(主に知覚・感情の動詞など)とはしばしば连接的な事例が多く見られ(「～の隠らク惜しも」など)、副詞等の単語の介入はできないが、強意などの接尾辞は膠着可能である(「～行かクしえしも」など)。

また、{～することとして} 義、あるいは {～することには} 義をあらわして、後続の引用部を導入的にしめすための修飾語節成分ないしは状況語節成分にしばしば用いられる点（『～の申さ-ク「…」と。』・『～の告ぐ-ラク「…」と告げつる。』）で、広義の連用修飾的な機能を帯びていると言える。このような振る舞いは、接尾辞的助動詞が付く場合のク語法でも同様であり、表Iが規定する三つの動名詞要件（a, b, c）を逸脱していない。

以上、第2節の考察の限り、古代日本語における動名詞に準ずる語形として、最も古くはク語法があり、また、その衰退とともに拡大する名詞用法のハダカの連用形（連体形転成名詞）が、動名詞に相当する語形として機能している可能性があるということになる。

### 3 古代日本語において「分詞」に準ずる語形

#### 3.1 分詞の下位分類

現代日本語では、宮田1948で「シテ」・「シナガラ」・「シツツ」及び「スレバ」・「シタラ」が「分詞」（その下位区分として状態性と条件性の分詞がある）とされるが、なぜそれらが「分詞」と呼べるかについての説明はない。また、これらの語形に関連して、「連用形+連用形」（「考え考え答える」）の形式、及び、連用形に-ナガラ・-ツツのほか-ニなどの接尾辞がつく語形については、高橋ほか2005で「副動詞」というカテゴリーとして類別している。このほか分詞的なものとして取り上げた先行研究は見当たらない。

古代日本語では、分詞は、下位区分はおろか、アルタイ語学や再構成論の文脈でも古代日本語の「分詞」というカテゴリーは管見ながら見当たらない。一部の研究（須田2000, 須田2014a など）で、上代語用言のうち形

容詞類における受動性の分詞の存在(いわゆるミ語法)についての言及があることは、先稿でも示したとおりである。

言語によっては、テンスないしアスペクトに関わる多様な分詞形が設定される場合(未来分詞・アオリスト分詞・完了分詞等)もあるが、それらも含めたより上位の包括的なモデルとして、大きく二類型に分けておくことは有効かもしれない。すなわち、分詞を比較的発達させていると言われる現代英語などのように、能動ないし現在の分詞、及び受動ないし過去の分詞という大区分にひとまず依拠するということである。この区分設定の仕方は、ヴォイスとテンスを跨ぐ広範な範疇の意味を基準として類別するというにほかならない。能動または受動とは、ヴォイス的な範疇意味であり、一方の現在性または過去性とは、テンス的な範疇意味を指してのことだと考えられるからである。分詞をめぐるヴォイスとテンスさらにアスペクトとの関わりについては、3.3節で後述したい。

古代日本語のひとまずは動詞について、表Iの分詞要件を満たし、かつ下位区分としてヴォイスとテンスというカテゴリーを跨ぐような範疇上の二分法 — 能動=現在の分詞、及び受動=過去の分詞 — で捉えることのできる語形は、確認できるだろうか。表Iで分詞の特徴要件として示されているのは、(f) 格支配が明示的であること、(g) 連用修飾機能が強いことであり、より周辺的な要件としては、(h) 曲用が十全ではないこと、であった。

### 3.2 分詞の修飾機能

分詞は、動名詞ほどではないにせよ、ある程度の連体修飾機能を有していると考えられる。例えば現代英語の場合、動名詞とされる ‘a sleeping car’ (寝台車両／概念的には言わば {ねぐるま}) のようなより连接的な合成によって単一的な概念を構成することをよく許容するのに比して、分詞とされる ‘a sleeping child’ や ‘a wounded soldier’ が概念上あらか

ているであろう「寝ている子」・「負傷した兵士」では、より修飾（連体）的な要素になっていると考えられるからである。

だが、能動＝現在分詞であれ受動＝過去分詞であれ、分詞の最大特徴はいわゆる「分詞構文」として取り上げられるような、その副詞節性、即ち修飾機能のうち連用修飾的な機能である。

この連用修飾機能という特徴は、分詞の要件となる (h) 曲用が十全でない、ということにともなって体言性が最小となる連用節であること、そして、ほとんど本来の動詞と同等に (f) 格支配が十全であること、によっても裏付けられる。この限りで、分詞とはいわば動詞が単に定型（終止用法）であることを避けるための語形ともとれるような振る舞いであるが、逆に見ればそれは、連用的に振る舞うことを主担するゆえの結果であると理解できる。

こうした性格をもとに、古代日本語において類推される語形を探索した場合、最も有力な候補は二つ考えられる。一つは、いわゆる助動詞等を伴わない中止用法の連用形（ハダカの連用形）— 但し本稿で先に「動名詞」と同定した名詞的用法（連用形転成名詞）は品詞を異にする点で除かれることになる — であり、もう一つは、「連用形＋テ」という語形である。これらは指摘するまでもなく、曲用に制約があることに加え、格支配は十全であり、主節の事態に対して広義連用修飾的（重文並列関係を含む）にはたらく典型的な非-主節述語の語形（非定型）といえるからである。

ひとまずは分詞としての修飾についての要件をこの二者が満たしていると認められるので、以下、この二者（「ハダカの連用形」と「連用形＋テ」）について、分詞を二大別する基準ともなっているヴォイス＝テンシ的な範疇意味において対立的であるか否かを検証することで、分詞としての妥当性を検証したい<sup>[注5]</sup>。

### 3.3 分詞におけるヴォイス＝テンス的な範疇上の対立

古代日本語文法のうち、主として動詞アスペクチュアリティの観点から論じた Takeuchi 1999では、上述の二語形は、動詞の conjunctive (接続形式) の典型として説明されている(但し、「連用形」は語尾/-i/として、「テ形」は/-te/として記述)。興味深いのは、両者間のアスペクチュアルな偏差として、「ハダカの連用形」が non-anterior であり、「連用形+テ」が anterior である、と説明している点である。

テ形と完了ツ形とが、同根的な出自である可能性については従来指摘されてきたことであるが、Takeuchi (ibid.) もそれを否定していない。テ形が anterior construction を構成する anterior conjunctive となったのは、元来 perfect (anterior とほぼ同義) 的であるツ形の「連用形」— 即ち「-テ」— と、元来 imperfective (non-anterior) である/-i/ (連用形を構成する末尾形態素) との対立のなかで、再分析されていった結果であるとしている。テ形の本質が anteriority にあるとしていることは、川端1997などとも矛盾しない指摘でもあり、注目しておいてよい。

今、この主張をヴォイス＝テンス的な範疇との関係で捉え直してみるならば、一方のパーフェクト的であるとされる「連用形+テ」は、ヴォイス的には受動性に、テンス的には過去性に近似している面があると考えられることができる。というのは、受動とは動作の完成に伴って対象に対する動作が達成することではじめて成り立つ構造になっており、つまり、完成的 (perfect) であることとは、すでに一定の影響を受けた (passive) そのあとの (past) 状態的事態として理解され得ると、考えられるからである。これは、動作の結果としての状態 (perfect resultative) が、テンス的過去と近似あるいは不可分な性質を有していると認識されることなども平行した現象と言えるだろう<sup>[注6]</sup>。

これに対し、もう一方の「ハダカの連用形」が、未完成的 (imperfective)

であるとされていることについては、ヴォイス的には能動性に、テンス的には現在性に近似している、という認識のされ方に起因してのことだと考えられる。ある事態が未完成的であるとは、完成的であることとの比較において、持続的ないし進行途中にあるという意味で作動的な（active）事態として認識され得る。それと同時に、持続的ないし進行途中という本来アスペクト的なありようは、特に相対テンス的な現在と融和的である。というのも、持続進行するありようは、絶対テンス次元（発話時現在基準）ではどのテンス位置においても成立するアスペクト局面であるが、相対テンス次元においては、持続進行的事態は常にその事態の成立時点現在にアンカーしていると認識され得るからである。

したがって、この複合的な範疇意味における両形式の対立ぶりがあるとすれば、ハダカの中止法連用形は能動＝現在の分詞に相当し、「連用形＋テ」は受動＝過去の分詞に相当する、という捉え方は十分成りたつことになる。

実際、高橋2003が指摘したように、現代語のハダカ連用形とテ形とでは、連体修飾句のなかに組み込まれた場合に適否が分かれるのも、このことと符合する。一般に、先行的な与件性が生じている場合には、連用形ではなくテ形が用いられるとされる（「物置を改造して（\*改造し）うまれた金沢の研究施設は、～。」）。こうした振る舞いは、現代語においても連用形との比較におけるテ形が完成的なアスペクチュアリティ（perfect/anterior）を含意する性質を持つことを裏付けていると言えよう。

古代語の事例では、反例と思われるものも散見されるが、稀少例にとどまるものである。「我さへうち捨て奉りて、いかなるさまにはふれ給はむとすらむ。」（源・玉鬘）（私さえもが（姫を）お見捨て申し上げたならば、～）・「さすがに立ち出でて、人もめざましと思すことやあらむ。」（同）（さすがに（私明石上）が出向いていったら、人（紫上）も不愉快に～。）な

どのテ形は、「-ては」のかたちになると、仮定条件性がよりはっきりする(小田2014)。確かにこれらは、例外的にテ形節の事態が未実現であるという意味で仮定の条件を示している。ただ、これらの少数の反例的な事例でも、単なる仮定条件ではなくいわゆる反実仮想であって、実現した場合を仮に想定した概念構造になっている点にも留意しておきたい。ハダカ連用形節が、テ形節との比較において非確定的であるかについては、さらに調査が要るが、多くの場合はテ形節の内容は確定的な事態をあらわしている。つまり、接続的意味の生起に関して、テ形節はハダカ連用形節に比べて、後件の事態に対する何らかの前状況性ないし与件性を含意していると考えられる。先述したテ形の anteriority とは、この与件性などと等価な意味的質を示していると言えよう。

このように考えると、Takeuchi (ibid.) の主張、即ち、「ハダカの連用形」は non-anterior をあらわし、「連用形+テ」形は anterior をあらわすということは支持でき、そのことは前者が能動=現在のであり、後者が受動=過去のであるという本節の主張と矛盾しないものである。

### 3.4 派生語幹としての「連用形」

#### (1) 助動詞類が「連用形」に接続すること

次に、「連用形」の側から検証すべく、いわゆる「助動詞」とされる接尾辞類の振る舞い(助動詞の連用形)について観てみたい。というのも、連用形はハダカの場合だけではなく、-テを屈折させたのと同様に、「助動詞」類を伴って複合的に述語を構成することもあるからである。

この観点からは、連用形は、テンスカテゴリーとアスペクトカテゴリーと緊密である。なぜなら、助動詞類のうち、連用形に接続するのは、この二つのカテゴリーのものに限られるからである。即ち、テンス的過去を示すとされる接尾辞キ・ケリ、そしてアスペクト的完成ないし結果存続をしめす接尾辞ツ・ヌ・タリである。このことを形態論的な観点から見れば、

連用形は過去テンス語幹及び完成的アスペクト語幹になっているといえる。このことから考えられるのは、ハダカ連用形がテンス及びアスペクトの両カテゴリーと親和的であるということである。言語一般には、ある意味範疇を重複してコード化することは冗長さを増すことになるため、「連用形」自らが過去テンス的意味を含意したうえで、過去テンスを示す接尾辞と共起的であることは考えられず、同様の根拠で、完成的アスペクト意味を自らは含意しない、と類推される。

つまり、連用形は派生語幹 (derivational stem) として機能することにおいても、過去や完成という意味的質を含意し得ないものだと考えられ、そのことはハダカ連用形がテンス的現在性への傾きを有することと矛盾していない。

## (2) 助動詞類が「連用形」を欠くということ

加えて、過去テンスの接尾辞キ・ケリについては、どちらも「連用形」を持たない、ということも合わせて指摘しておきたい。この事実は、テンス的過去という意味範疇が、連用形のあらかず意味的質からは乖離している、ということを示唆していると考えられる。だからこそ、それ自体はテンス及びアスペクトに親和的な「連用形」を欠如しているのだということである。

また、このほかに「連用形」を持たない「助動詞」類としては、推量的ムードを示すム・ムズ・マシ・ジがある。この振る舞いは、キ・ケリの場合と同様の論理で、「連用形」があらかず意味的質と、ム・ムズ・マシ・ジがあらかず推量ムード的意味とは互いに乖離している、ということ根拠づける事実として捉えることができる。

これらのことを根拠に類推されることは、「連用形」の持つ本質的な機能が、非-過去テンス的であり、かつ、非-推量ムード的であるような意味的質に対して親和性がある、という帰結である。非-過去テンスの意味と



は、その事態がテンス的現在またはテンス的未來における現象であることを意味している。また、非-推量ムード的とは、推量でないという点で、ムード的には発話時現在における断定的な「確言」性を意味していると考えられる。即ち、これを統合した意味範疇としては、いわば「現在の実現指向性」とでも呼べる、{将来の実現を現在確信している}といった意味範疇などが考えられよう。

こうした仮に「現在の実現指向性」的な意味範疇は、本節の問いに遡って考えるならば、imperfective、即ち {完成に至っていない} という意味で non-anterior である事態のありようが示す範疇と矛盾してはいない。そうであるとすれば、前節でハダカ連用形が示すとした未完成性も、これら助動詞接尾辞類が後接する複合的用言に措定できる「現在の実現指向性」も、どちらもその事態が進行過程にある (active) 事態のありようという意味において、底通した意味的質をあらわしていると理解できる。

つまり、テンス的過去を示すキ・ケリやムード的推量をあらわすム・マシなどにおいて、そもそもそれらが連用形を欠くという事実注目すると、本来連用形自体に非-過去の非-推量的な意味的質への傾きがあると考えられることになり、それはハダカ連用形がテンス的現在性への傾きを有することと矛盾してないがゆえであると考えられる。

本節のここまでの考察から、動詞の場合において、ヴォイス的能動ないしテンス的現在を含意するタイプの分詞の特徴は、いわゆる中止法の「ハダカの連用形」において実現しており、また、ヴォイス的受動ないしテンス的過去を含意するタイプの分詞の特徴は、「連用形+テ」形式において、ハダカ連用形と対立的に実現している、ということが帰結される。

## 4 まとめ

動名詞及び分詞の要件として抽出されたそれぞれの三現象について、古代日本語において各々の要件を満たす語形を割り出していった結果をまとめると、①古代日本語における動名詞に準ずる語形としては、最も古くはク語法があり、その衰退とともに拡大する「名詞用法の連用形」(連体形転成名詞)が、同定された。②古代日本語における分詞に準ずる語形としては、動詞の場合において能動=現在のなタイプの分詞に相当する語形は、中止用法の「ハダカ連用形」形式によって実現しており、また、受動=過去のなタイプの分詞に相当する語形は、「連用形+テ」形式によって実現していると同定された。梗概は表Ⅱのようにまとめられる。

付言すれば、結果としては形態的な同形性(「連用形」)に依拠して動名詞形と二種類の分詞形とが分布していたことになる。また、「ハダカ連用形」は形態的により無標の形式であると言え、一方の「連用形+テ」が形態的により有標の形式としてあり、機能的にもその受動=過去性は、能動=現在性に比して相対的に有標な性質を持つものである、ということを含意していることになる。

表Ⅱ 古代日本語の動名詞と分詞及びその推移

準用言 \ 時代	上代	中古	中世	近世
動名詞	ク語法	・・／／	連用形転成名詞	・・・・・
能動=現在性分詞	ハダカ連用形中止法	・・・・・		
受動=過去性分詞	「連用形+テ」形	・・・・・		

## 【注】

[注1] なお、須田2018で大方の検証を経た同表であるが、「不定詞」の同定を試みた須田2019a、またその後も海外で再度の公開検討の機会(Suda 2019b)を得

ているが、特に大きな変更は求められていない。

- [注2] 但し、「物語など聞こえ給ひてのついでに」(源・浮舟)、「見給ひてより」(源・夢浮)など、格が膠着する事例も僅少なながら中古に散見され、「連用形+テ」の形式は曲用を全く欠如していたと言い切れない面もある。
- [注3] 現代日本語の後置詞については、高橋ほか2005の第16章に詳述してある。
- [注4] 詳細は、須田2014b, 2016など参照されたい。
- [注5] 分詞の要件と認めた事項が、そもそも格支配がしっかりしていて、ヴォイスとも関与的である性質を帯びているということから、当然ながら、用言のうち形容詞類との関わりについては、相対的に弱いものか偏ったものにならざるを得ない。ただ、須田2014aなどで、上代の形容詞の受動分詞形と認められたミ語法(形容詞語幹+mi)において、その末尾形態素/i/が、動詞連用形末尾と同形であったことは、全くの偶然ではないと思われる。
- また、形容詞連用形末尾(ク系・シク系とも)/-ku/が、現代語にも「連用形」としてそのまま引き継がれ、テ形を派生させている。が、動作ではなく状態属性をあらわすことを専らとする形容詞であるため、両形の機能分布は、動詞の場合とは異なったものになると思われる。しかしながら、曲用しない、形容詞なりの格支配がある、連用修飾機能が強い、という分詞の要件は満たしている。
- [注6] 受動ヴォイス構造と時間構造との関わりについては、須田2006b, Suda (forthcoming)などを参照されたい。

### 【主な参考文献】

- 小田勝2014『古典文法総覧』和泉書院
- 梶井恵子1996『日本語の機能表現—「て形」の変遷—』お茶の水女子大学博士論文
- 川端善明1997『活用の研究』清文堂出版
- 信太知子1993『『万葉集』における連体形準体法とク語法——句構造の観点から』『小松英雄博士退官記念日本語論集』三省堂
- 須田淳一2005『ク語法』と連体形準体法』2005年度白馬日本語研究会 研究発表ハンドアウト
- 2006a『『文』の体言化—クと-ラクとのちがい』『国文学解釈と鑑賞』第71巻1号
- 2006b『ミ語法とヴォイス』『日本語学』第25巻5号
- 2010「上代語「を」の格性疑義」ひつじ研究叢書言語編第89巻『日本語形態の諸問題』(須田淳一・新居田純野編) ひつじ書房
- 2014a 項目「ミ語法」『日本語文法事典』大修館書店
- 2014b 項目「ク語法」同上
- 2016「用言ハダカ形のク語法—時間局在性についての分析—」『専修大学人文科学研究所月報28号』

———2018「準用言 (non-finite verbals) の定義について」2017年度春期類型学研究会 発表ハンドアウト

———2019a「古代日本語の不定詞」『専修人文論集』第104号

Suda, Junichi 2019b Old Japanese Non-Finite Verbs: gerunds, infinitives, and participles. *LES CONFERENCES PAR JUNICHI SUDA* (Professeur invité de l'EHESS). EHESS Paris

——— (forthcoming) Lexicalization of Primitive Voice Category: An Athematic Verb Group in Old Japanese. *STUDIES IN EASTERN AND CENTRAL ASIAN HISTORICAL LINGUISTICS AND PHILOLOGY*. M. Miyake, J.A. Alonso, and J. Kupchik (ed.). Brill Publishing

Takeuchi, Lone 1999 *The Structure and History of Japanese*. Longman

高橋太郎2003『動詞九章』ひつじ書房

高橋太郎ほか2005『日本語の文法』ひつじ書房

福田良輔1957「原始日本語と文法」『日本文法講座3』明治書院

Frellesvig, Bjarke. Shibatani, Masayoshi. Smith, J.C. 2007 *Current Issues in the History and Structure of Japanese*. Kurosio Publishers

Vovin, Alexander 2007 *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese*. Global Oriental

Martin, Samuel 1987 *The Japanese language through time*. Yale Univ. Press

宮田幸一1948 (再2009)『日本語文法の輪郭』くろしお出版